島橋和已全集

第八巻

吉川幸次郎
埴谷雄高

河出書房新社

高橋和巳全集　第八巻

小説8　©1977

一九七七年　十一月十日　初版印刷
一九七七年　十一月十五日　初版発行

著　者　高橋和巳

発行者　佐藤晧三

発行所　河出書房新社
東京都新宿区住吉町九五
電話　〇三―三五五―五三二一
（編集）三五五―五三二一
振替東京〇―一〇八〇二

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

邪宗門（下）　3

解題・補記・補訂

453

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八巻　小説8

邪宗門（下）

第一一章　捕虜

1

戦死の公報が教団本部へ伝えられ、さらにその遺骨も帰ってきた長老貝原七兵衛の息子、陸軍軍曹貝原洋一は、じつは死んではいなかった。

事変いらい常に第一線部隊として闘いつづけた第十×師団に属する中隊の伍長だった彼は、昭和十四年冬いらいの蔣介石軍の総反攻にたいする反撃作戦に従軍し、行方不明となった。いったん占領した高地拠点の守備を命ぜられ、十数倍の敵に包囲されて中隊がほとんど全滅した時、辛うじて生きながらえて、数人の兵士とともに本隊に帰ろうとして彷徨中、捕えられて捕虜となったのだ。右足首を捻挫し、しかも膝まで没するぬかるみの道を匍うようにして十数日間さまよい、ある部落の井戸に近寄ろうとして草むらで気を失った。そして目が醒めたとき、国民党正規軍の捕虜となっていたのである。

死すとも虜囚のはずかしめをうくる勿れ……。彼は唖をよそおって、いっさいの質問には答えず、隙を見て自殺を試みて失敗、遠く後方へ送られ、重慶近郊の谷間に設営されていた捕虜収容所にはこびこまれた。

その収容所には百余人の日本兵捕虜がいた。階級肩章を引きちぎり、あるいは中国の服を着ていて、態度ではあきらかに将校だとわかる者も、自分は一兵卒だったと言い、誰もが山田や鈴木や中村など、あきらか

に偽名と知れる姓を名乗っていた。待遇は意外に寛大で、殺される危険のないことは数日のうちにわかったが、もし何かの拍子に自分が捕虜になっていることが内地に知れれば……という心配がたがいに偽名を名乗らせていたのだ。もし虜囚になったことがわかれば、家族は日の光の下を歩けない。戦いを好まぬ宗教団体の一員とはいえ、貝原洋一も捕虜として生きのびるよりはいさぎよく死ぬべきだと考えていた。

彼は最初満州事変に従軍し、いったん除隊になり、満州開拓団として佳木斯に入植したばかりだった教団員とともに開墾に従事し、二年後に再度召集された。そして満州守備に転じて任務交替した支那派遣軍部隊の補充として中支で戦った。彼は分隊長だったが、分隊員はほとんど山陰の農村出身者であり、またその半ばは後備や補充の兵で、内地に妻子を残してきていた。彼はまだ独身だったが、彼も自分が自分一人の身ではない点では同じことだった。いや彼に課せられた重荷はある意味では家族もち以上だった。

もう八年も、彼は内地の土を踏んでいない。そしておそらく今後も永遠に——。

最初の召集の際、京都裁判所の公判に赴いていた父が、堀江駒を介して、彼に餞別の言葉を伝えてきたことを彼は忘れない。

「戦場に赴く以上は、人と人とが殺し合わねばなるまいが、お前が卑怯な真似をしてもどうなるというわけではなく、教団に迷惑がかかってもいかん。普通の兵士がするように進み、普通の兵士がするように働いて死んでこい。積る話はあの世でしよう……」と。

だが平和時の農民の心情にはくわしい父の七兵衛も、戦場の心理には無知だったと言わねばならない。兵隊がそもそも自分一人の考えを持ちつづけるなどということは、できない相談なのだ。最初の三カ月の訓練期間中に、ポカポカと頬を班長や古年兵に打たれているうちに——そして歯を喰いしばって耐える苦痛のはてに奇妙な快感が湧いてきて、ぼんやり放心する時、早くも〈自我〉はどこかへすっ飛んでいってしまうのだ。ラッパと号令、皮革と汗の臭い、飯盒を鳴らしながら早飯を食って、銃をかついで走って、早糞をたれて寝る。隙間のない時間と集団行動がまた彼をやたらと〈健康〉にし、そしてふと気がついてみると、自分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

には何も考えることはないことがわかるのだ。好物だった湯豆腐を食いたいと思い、あるいは突如、木の叉や石地蔵にすら抱きつきたくなるような本能的欲求を覚えることの外には、自己を確認するすべもなくなるのだ。

戦場は、兵舎での訓練よりはむしろ気分的に楽だった。ぬかるみの行進は殺人的だったが、戦闘と戦闘との合間には、奇妙に、時間の流れの休止してしまったような暇があく。兵士たちは戦場にきてはじめて俳句をひねるすべを覚え、雨と泥濘に立往生したトラックの中で、稜線の彼方に敵の姿が動くのを見ながら花札をする者もいる。相手が中隊長でも気にくわぬことがあれば、憤然と言い争い、准尉が「どっちもどっちだ。やめとけよ！」と仲裁したりする。

だが一方、敵にたいする感情のありかたには、どんな観念的な戦意昂揚の教育も及ばない、そしてどんな宗教的情操もおさええない、〈戦場の論理〉があった。どこの戦闘でだったろうか。鉄道警備を命ぜられ、白い陽炎が線路にゆらいでいる中を戦友とともに歩いていた時、ふいにビシッという空気を鞭打つような音がして、並んで歩いていた戦友が折れくずれた。とっさに身をふせて、あたりをうかがった時、敵の姿は見えず、雨あがりの楊柳が葉裏を見せて輝き、山の影が画布を切裂いたように鮮明に見えただけであった。ふと横を見ると、何カ月かの間ともに飯盒炊爨をし同じ場所に叉銃し、同じ草むらに休止してきた戦友が死んでいた。そしてその時、彼は今まで感じなかった姿の見えぬ敵への怒りが、めらめらと燃えあがるのを覚えた。畜生、この仇はきっととってやる。その心理は実戦の経験のある者でないとわからない。彼はその戦友の死を契機にして、〈勇敢〉なる兵士となり、白兵戦では、手榴弾を振りあげている便衣隊の支那兵に向って突進していって藁人形でも突きさすように突きさす兵士となったのだ。拭っても拭っても、いつまでも消えない血糊を真向から浴びながら……。

戦場での毎日毎日が、かならずしも血腥いわけではなかった。ドラム罐の風呂にはいり、戦友と家族や故郷のことを語り合う時間もあり、現地の子供が彼のあたえたキャラメルを頬張るのを微笑して見る時間もあ

った。しかし彼は、父の理解しえなかった、そして教主にも理解できないだろう、戦場の論理に従って、何人かの人を殺し、いくつかの村から食糧を徴発し、そして莚を垂らしただけの慰安所の長い列に加わり、さらには罪もない支那の農婦を強姦した。

捕虜収容所に、ある時、眼鏡をかけ、くたびれた背広を着た痩身の日本人と、巧みに日本語をあやつる若い支那女子軍の将校がおとずれた。おどろいている捕虜たちに、二人は日々の食事や衣類の支給状態について尋ねてまわった。いや、ただ尋ねるだけでなく、厨にずかずかと入ってきて、捕虜の食事と同じ分量だけ自分で食ってみた。何かを調査する必要があって宣伝班の女子将校が通訳をつれてやってきたのだろうと彼は思った。だが彼ら二人は、収容所に泊りこみ、そしてその翌日から捕虜たちの〈教育〉をはじめた。

君たちは欺かれている。この戦争は聖戦でも何でもなく、日本国民全体の意志でなされているわけでもない。天皇を頂点とする少数の支配者や軍閥、独占資本家やそれと結託する官僚どもが、民衆の反抗心を外にそらせ、自分たちの利益を守るためにやっていることにすぎないのだ。日本人民は中国人民と同様に苦しめられ搾取されており、君たちが撃つ一発の弾丸は、内地で搾取されている君たちの父母の何滴かの血から成っている。君たちの武勇は君たちの真の同胞の餓死と貧困につらなり、君たちの忠誠は自分自身の首を真綿でしめあげる行為にすぎなかったのだ。力を尽して戦ったのちに捕虜となったことを恥じる必要はない。捕虜も人間的に待遇されるべきことは国際条約にも規定されている。ただ人間的に待遇されるに足る人間であるために、人間的な正しい判断と、罪を償う行為をなさねばならない。それは、真の敵は何であるかを見定め、人民の膏血をしぼって自分たちだけが肥えふとっている真の敵と闘うことだ。

何度も何度も繰りかえして、その痩身の日本人は説いた。広場に捕虜たちを集め、食事をともにして内地の農村の窮状を語り、夜にはまた数人を集めて、税金滞納の穴埋めに遺族補助金をまきあげる官吏の話や、出征兵士の妻を籠絡する町の顔役の話をしてきかせた。

日本人でありながらどういう権限をもつのか、その日本人が収容所の警備長と対等に話合うのを見てとると、要領のいい男や卑屈な俘虜は先を競って自分を売りこみはじめ、かつての上官の悪口や日本軍の腐敗を告げて、歓心を買おうとした。貝原洋一は人々のかげにかくれて、あまりにも素早い捕虜仲間の改悛の有様をじっと見ていた。それは戦いそのものよりも、むしろ陰惨だった。正体不明の日本人の説く論理がわからないわけではない。彼は天皇制に反抗して弾圧された宗教団体の一員であり、権力者は常に民衆から富を吸いあげ、犠牲を押しつけることも知っていた。だが、戦って殺し合い、しかも一たび捕虜となって後に、自分を正当化するいかなる思考も行為もあろうとは思えなかったのだ。国家間、民族間、異教徒間の闘いのほかに、同時に別な闘いが、つまりは階級の闘争があることは事実には違いない。しかしその闘いのみが絶対であり、他のものは単なる仮象にすぎないか。自分があびたあの血潮は幻にすぎないか。

だがその奇妙な日本人に同行してきた中国女性が、なぜか彼に眼をかけ、他の数人の選ばれた者たちとともに中国語を教えてやろうと言った。急には人間の考えは変りません。いや、急に変える者よりも、そうしない者のほうが、本当は信頼できるのです。それよりも、ともかく中国の言葉を勉強して、中国の文化、中国の民衆の喜怒哀楽にじかに触れなさい、と彼女は言った。「あなたがたも見てきたでしょう。一つの村を占領すれば、その城壁に日本軍万歳と貼紙がしてあります。しかしその貼紙の裏には、日本帝国主義打倒の文句が書かれているのです。共産軍が進駐すれば共産軍の、国民党軍が立寄れば国民党軍の、そして日本軍が入ってくれば日本軍むきの歓迎の言葉を並べる民衆の悲しみが、あなたがたも人民なら解るはずです。你們是日本人、我是中国人、可是、可是……咱們都是人。明白不明白?」

彼女は断髪に中山帽をかぶり、胸と脇腹に大きなポケットのある軍服を幅ひろい革バンドでしめ、腰に拳銃をつるしていた。中国側についてくる才気走った日本人よりもその丸顔の女子軍将校のきりっとした態度に、なにか心をゆさぶられるものがあって、彼はその女性から毎日二時間ずつ北京官話を習った。

むろん彼女の熱心な授業もその言葉通り日本人捕虜に中国を理解させようとするだけのものではなかった。

うすうすは初めから解っていたことだが、第一線で日本軍兵士にむけてマイクを通じて反戦の宣伝をする宣伝工作員として、貝原洋一たちは訓練されていたのだ。はっきりと教育目的を語られる前から、貝原洋一はそれに気づいていた。しかし拒否するつもりなら病気や無能を装って避けることもできるその道を、あえて彼は歩んだ。収容所の退屈な、しかし一応は平和な生活に蘇った救霊会信仰、一列平等、衆生共存の教えのためではない。ただ何かの信念に輝くその李珪芝という女性の瞳と、なんども繰りかえす初歩中国語の発音の美しさに触れている時だけ、生きのびても死んでももはや同じことであり、二度とは故郷を踏めぬ身である自分の〈余生〉にも許されたある喜びが感じられたからだった。

「従前我送給你的書、已経看完了么？（この前さしあげた本はもう読んだ？）」

「还没有看完、很難懂的（いやまだ、むつかしくて）」

「慢々児的念、不要急（どうぞ、ごゆっくり。焦る必要はありません）」

「我……我……」

簡単な中国語はすでに交せるようになって、しかし複雑な感慨は表現しえず、微笑して靴音たかく立去ってゆく、その女性の後姿を茫然と見やる時、〈死んだ〉彼は、その瞬間だけ確かに生きていた。

2

重慶から長江をくだって、貝原洋一が反戦同盟員としてはじめて任務についたのは、宜昌ちかくの、そそり立つ山の中腹でだった。周囲は岩壁の露出する山また山、長江もこのあたりは激湍急流、暗礁も多く、舟は竹の索で陸上から曳かねば遡行できない。

すでに五月から行動をおこした日本がわの上海派遣軍は、第三師団が信陽から泌陽・新旬舗の激戦を経て宜昌へ、第十三師団は安陸から旧口鎮・沙洋鎮を征服して宜昌へと、南と東の二方から迫っていた。それを迎えうつ国民軍部隊の一つ、廖参謀に率いられる三千の遊撃隊の宣伝工作班員として、宣伝班員や通信班員

とともに藜の杖をついて、曲折する小道を彼ははいのぼった。付近の農民二人が彼らを案内する。そしてふいに視野がひらけた時、谷間に日本軍の先遣隊が休息しているのが見えた。

狙撃兵が身を隠すための洞窟がかたい岩壁のいたる所にあけられ、彼らはそこに身を隠して夕暮れを待つ。霧のような雨が降り、そして短く声を区切って猿が啼く。

野営する日本軍の飯盒炊爨の煙の消える頃、備えつけたマイクに、担いできた蓄音機の音楽を流す。誰が作り誰が吹きこんだのか、「父よあなたは強かった、兜も焦がす炎熱を」という軍歌の替え歌が作られていた。

父よあなたは馬鹿だった
兜も溶かす炎熱を
敵の屍とともに寝て
泥水呑んで草を嚙み
顎を出しつつ幾千里
よくこそ歩いて下さった

だが貝原洋一はすでにあちこちの戦場で放送されているというこの替え歌を流すことに反対した。

「どうしてです」

彼の最初の任務遂行を見とどけるべく同行してきた李珪芝が言った。

「他に歌がないのなら、しかたがありません。しかし荒城の月もあるんだから、それを流しましょう。こういう替え歌は、日本の兵士が酒保や慰安所で自分で歌うのならいい。だが、こんな歌が敵側から聞えてきたらどんな気がすると思います？　人間は自尊心をもつ動物です」

「今回のことはあなたにまかせましょう」李珪芝はかすかな月明りの射しこむ洞窟で、中国語で言った。

静まりかえった山中の谷間に、ふいにマイクを通して、針がレコードをひっかく音がし、そして物悲しい歌が流れる。距離は上下であるために事実以上に離れているように見えるが、谷間におこった一瞬のざわめ

きはほとんど手にとるようだった。銃器が触れあう音がし、軍靴が岩を蹴る音、そしておし殺した声で上官が命令する声……。

春高楼の花の宴、めぐる盃かげさして
千代の松が枝わけいでし……

歌詞が二番に移り、さらに三番に変るころには、しかしあたりはふたたび深い静寂にもどっていた。日本人なら誰でも知っている歌曲に、迎撃配置につき、地上に伏せたまま、兵士たちは耳を傾けているのだ。

そして歌曲の終り近く、貝原洋一は震える手でマイクをとり、スイッチをいれた。彼は歌曲の余韻に自分の声を重ねあわすように語りかけた。

「親愛なる日本軍兵士諸君、なつかしい我が同胞よ。こちらは日支の人民の協力によってなる反戦同盟であります。自分はその反戦同盟に所属する日本人海原洋三であります。しばらくの間自分の言うことを聞いてください。この戦争、この殺戮、この流血は、無意味です。近衛首相も日本には領土的野心はなく経済的制覇の意図もないと語っていることを御存じでしょう。東亜は共存共栄しなければならぬと、常々皆さんも言っておられるはずです。ではなぜ戦うのでしょうか。遠く家を離れ家族と別れ、それぞれの生業を捨て、父母や妻子が病んでも見舞うことすらできぬ苦痛を忍んで、いったい何のために戦うのでしょうか。日支の間には、日支の人民の間には、たがいに憎みあわねばならぬ何の理由もありません。

心優しい日本の兵士たちよ。あなたがたは行軍の途次、路傍に伏せる罪もない農夫の屍を見て、焼けおちた家の前で泣く老婆や幼な児の姿を見て、なにもお感じになりませんか。荒れはてた田畑を見て、心に痛みを感じませんか。風土や言葉こそ違え、人間の悲しみは共通です。両親を失って悲しむ子を見て涙をもよおす気持があるなら、それを我が身のこととして、もう一度なぜこんなことをせねばならぬのかと考えてみてください。日本の兵士たちよ。あなたがたの大半は農村の出身者です。なぜ鍬もつ手に銃をもち、同じ農民が労苦して耕す田畑を荒さねばならないのかを、考えてみてください。蘆溝橋いらいすでに皇軍の死傷は五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com